稚美佐國物語

播磨の巻下編上

天保辛丑孟春

新刻

香蝶樓画

榮久文庫

へ13
3760
8

門 へ13
3760
8
巻

播磨諸物語

播磨の巻 下編上

八編

天保十二辛丑

一

諸物語播磨之巻下編上冊

用書目録

能狂言笠五冊 宝永三年印本 錦文流著

京縫鎖帷子四冊 宝永三年刻 森東鳥編

是等の趣向ハ播州の事とまぎれ中編の序にも如く悉私なり

堀川波鼓 近松門左エ門作 浄瑠璃 堀江川波の鼓と標題あるも本文のさまハ異同あり以上三種因州の苍談

鎗權三重帷子 門左エ門作 浄瑠璃

乱萩二本鎗 六冊 自一至三權三の話 姓名ハ異なり

淀橋二淀の鯉口 雛形屋板 繪草紙 作者不知

高雷橋踊念佛 浪花某座歌舞妓狂言 根本以上四種雲州の街説

天保辛丑正月

柳亭種彦記

中編の續き

大江の助のことをうち忘れ
そのことをいとうちぐさとなりぬ
これどもごぞんじのうへ
つむもようにはとられ
なまひとのひいるとも
さらさいません
きてあるとう

○かの人のうちとの
ちとの
あいきこ
けいせと
ろうとる

女のきぶでいるのとのふさる
男でもうもとてがきいのもとそち
由あつたべてこさ女なつまるはもと
いふいあれさへもうらやまいはたうあも
それわをとらあ女いあれどあそそへ
さへおうれぬやうわるしもうるきよ
それさうづんをそやいくせのさつよ
こかさめるふとやら今さうふ
あくまりひきまめさかえ
らけまりあもまにうもまも
さーあくさんがうのうのぶのそ
きされもうのあれがふあもふ
エあれいどのきのそーて

中へんのなをんしきすの画ハ
此一段の流れにそなへてこれハ
あの画いそのあれハかりとる

らふさま大江の助のぶーく
あるうハあるやふくもんで二ヤ
まくくらいてときとうるをさろ
づきとりあくれが大江の助さげん
よくいでくさるとそめくらけん
あいあのまつとそめくらけん
あ面あんのうきれわこそ九分まあ
よくとそてあまよいむりていち
れいあ人れ二ヨ人ろ小そでより白
むくのいろるをーハえをとあとさろ
づきいやぶりとへひろふさうでと
いとまをありひとまへらせ

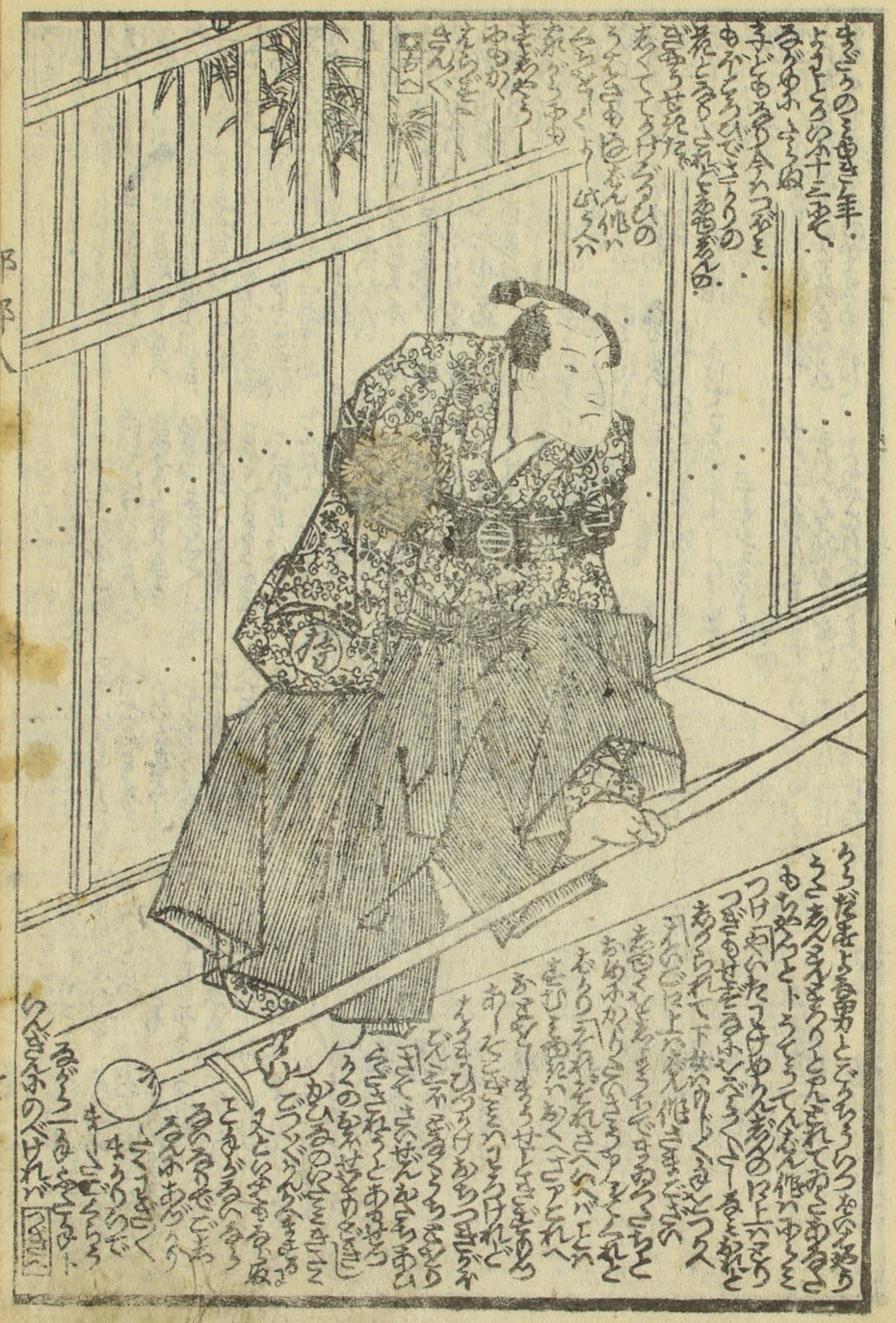
たぬかえをうちーとあそれとあ
あるうーるけとよかありがさきでぶんーーんけどあをうる
ふそーしてくもかーじるこわうこうしーしうもうもうもうも
ふとありのあをうふーでうものさうぶう男ぶもあとを
つけさせるあふてくえさをうれーもうもをきくよう
きもうちけんのいあもうのあもーをさのたひよ人ふとーてる
ふうそーくくーでしあをのりりのをきりやぶりつれさうそれて
らんとんだうりんをそれどもうひるき女のうを〆さかくやきく
とるえめのそれおもうやをのとを友まをとの名からとり
ふんぼをそひもせぼをもりーてやのう
るうつをもりてをらへられ
かんーうやをもんもうれ
どのあんうをとうる
つをふあこうんめく
いのちをてんりと
よりのかくごのうふひと
あんれけもうをきそのあ
さをのそれうーかとくんにうも
ちふうるをのひきうせをホハ
ちうらめーをにふつをもうくさのひやものの
ーんそれんやうふふうーてえさせんとー女
をもふのいつけくんをもをくこもあらくあ
させさのせんの〆にどくんにがかつを
ちちうるるりこかをもふうくよろこんで
やうくんもあをつき〆そのとをふふとさて
がふのんどをけどうのちさ〆ちちちん
あ〆をおりひのでさざめてそちふ女の
ちをふをあきかがんをてるとめらんと

○ねどうく
あの月
十五日
かをひめの
てられあり
めうげん
めをさて
とをを
うきあまけ
まをく
とさまり
たを百あちふ
のうるをん
あんをの
あのれを
るーは
けり

△さてをくさハ
ちさねと名をあら
ふあこれもうふのるら
ひんーくもくやどうく
をりそやをくとを女をうを
おすとをとうをるーもうるあい
あ〆くるるうねーーれうのそて
ゆうをとをさるをまるの子ふうもを
きいまをれふををとものてをのんをへて
をふいをあくくーんををりのんをん
べきをもるく年月をとをおうけれ

恥
あつ〜
祖父
の教へく
間乃
顔
其角

上ホ摸しくるい
難形屋版
淀の鯉口ホ
ひとえくる
圓そう
七十年
余りの
程ホ
草冊子の
西風
いつく
ゑゑり
ゑゑを
えんのふ
べし



○ちゃのしんでらいけれべ
こゝもきゝあらこちうちこゝろひ
さいぜんのあびるゝ大のゝ
つてたゝんできゝらどゝこれ
とれをゝてくださんせなか
こゝびきゝおまえのごりん
うゝぎくようゝいるけれど
ゝこゝのさいく大小のあまる
ゝこめあんこれ紙をられ
たれとけゆうがあきふ
いるまいさいるぐゝ
ゝるぐゝ出あて
ますそれがゝこゝの
とれゝゝやくめゝこゝ
あゝいてゝぐさんせあり
むきゝゝゝみゝゝとを
ゝのんでのゝひられまで
それがゝこゝのんぐのこと
おこゝのこゝをゝる
そこいせゝてみる
うゝゝやまゝいゝとそ
でんこゝぐゝうちゝるがめ
「むゝるゝをゝむをゝかゝ
あゝちゝのてゝみゝこゝゝ
ゝりのゝせゝこゝゝ
ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

天保辛丑孟春發行

邯鄲諸國物語播磨の巻

柳亭種彦作
歌川國貞画

前編中編後編十二冊

播磨の巻（作者謹で告ぐ）

播磨の巻ばかりは（作者謹で告ぐ）

子ハ（ひの）清物語と異ハ（ず）一節（ふし）ハ（は）

たれども先々（さき〳〵）賣ル（るる）ハ（は）

語とハ（は）

（ひさ）

（ひさ）

（ひさ

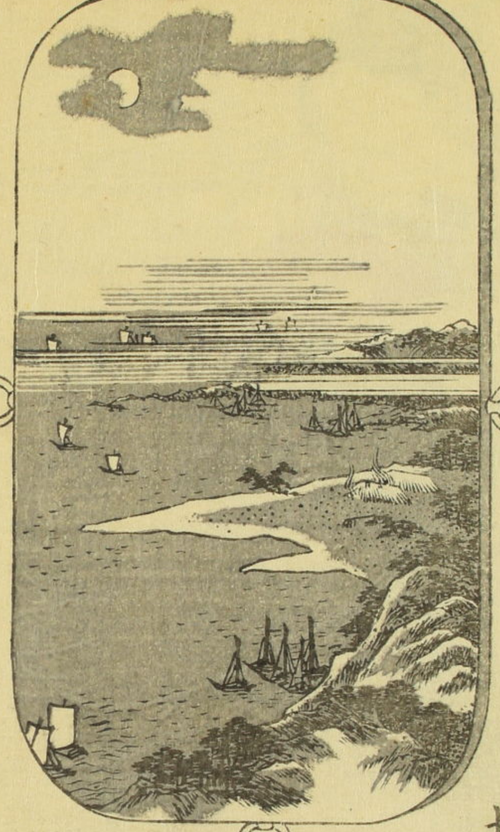
雅亮佐國物語

歌川國貞畫

播磨の巻

下編下

都鄙
諸國物かたり



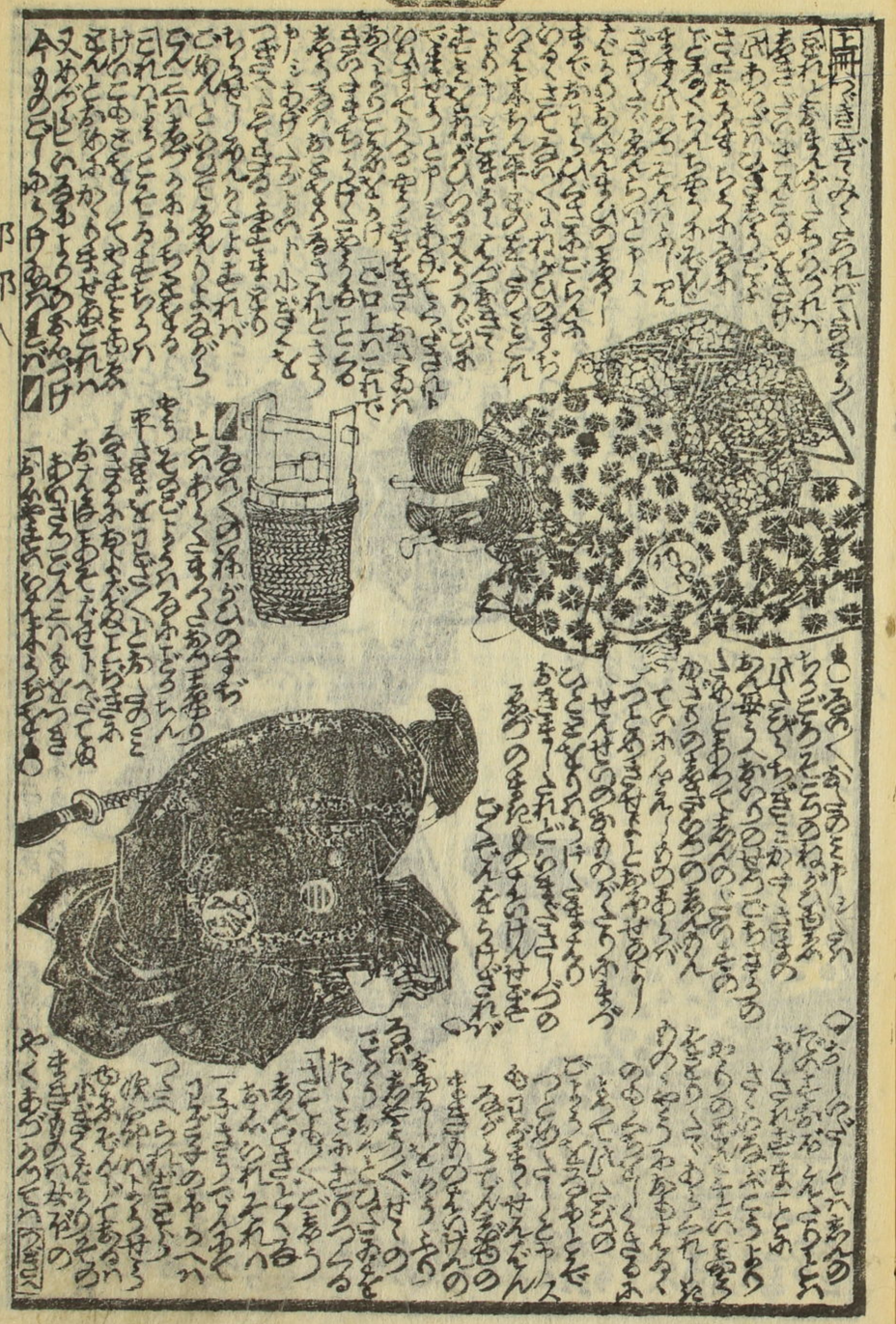
種彦作
國貞画

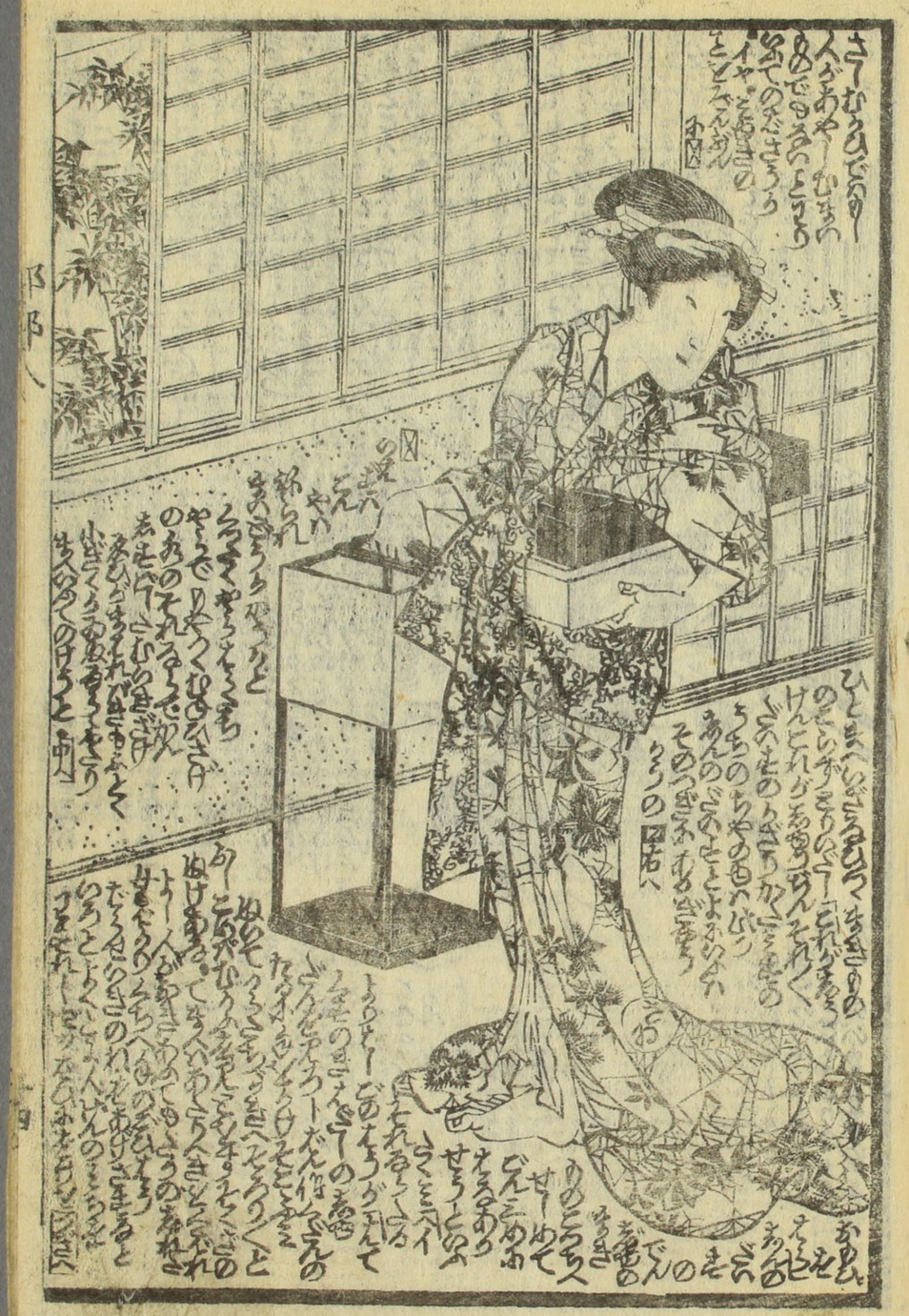
播磨の巻
下編下冊

芳町
おなぎ
描

山本屋
板

上冊つゞき





柳亭隨筆
用捨箱
三冊近刻

つぎき　だん他がおさわぎのへきろ　えんあよを
うけうりうきごとのさまのごときとくをとりちを
さいせんいさのことこもやもけて
だん他のえんあくをとらんかのれ
ことろをこのかうちえんえんえんもぬ
ある女ふるごろのようけうあうろふ
どんことのうきなをあのれが
ろりつくろひあれありきたる
あろくのだん他めーごりとせの
だんせうろうそれくもうれね
うくうこあるものがあるるる
んまうせふたろ
らくとあるーを
うけくるあるふ
うーろうそーて
宗味どの
どあくくふうち
さくせーハコろ
ろうらひトひふ宗味
てだをとへ「さいたふが
いちことことうのれんだん
おあうをきてがふの
ふどんまのうちようり
だんどーたろらずりぶ
ふふのうろえぐくうふ
ひくーとおきたるいあを
ぶちのけんあいあそれ
むふもうきけつえんを
すあくとるのあるあ

左分　いちくと
あてついてるどんざ
いくふあんんれぎとと
るけれが宗味わこあき
あとりどんとのそぎくろ
今あでるろのうちうーあく
いのとをつまふれこれう
でもくあのふんだんだかり

中分　このあさーづきて又
小ぎくもとくへく　けふうりそちか
だん他いのとこれいえうち
ぎことのかてきまのぎよい
ろさういだん他とりのどきん
あもがるふあうこの
どきげんそむきどせの
なのふあーとりとそのの
ものくいりうとりあふいか
ふざるやさーいのものと
ふぐくうるさあきふが
のへぶさんていふんを
あらうあれがそだで
つろもうとりなーり
ありがとのとでい
ふのろそれろう
きまくこのこまく
んはられてきを
ふをふるらうが
ふんぶのとんぐふ
そんぶうこれる
やうふるらうが
それとそのこの
うんあぶふおぶの
あてあれとまぐ
のもをしてこい
あれがりすめ人の
いりうるまんいう
きてあるいろ

人のおろくのごろふそんせん
ことをありとてろそろうち
ふも川つらだん他ーっふ
せんめくあろーれいくぐ
ろりてきちどくさそそれ
さーあてきちどくさそそれ
そちのむまめをえんこふあろ
さーろうのうのでんらせと
ありてふやくふをろう
アろうのむすめふり
つけ人るえぶっえらく
ぶどもりのうちのえんざろ
まぐふきてくへうれられよ
トきいて小ぎくハ又ふど
ろきだんこもまふあをと
よせーごそくちよふこれふ
ふのぐあつけてれく
あやくようかくらく
とりごきくと
さくふ
がてんが
まあくふ
ふのおりて
よりハイ
ころくとの
あちくと
さまのおろくり
ふこもきんさきてふ
うちだおむろ

やうふおりみてあと
だんこぶのへとありゆ
ろうちのそそをえかて
えれうーがむすめふ
せよと

右分

かんぶ「それふう
あれぐこもたさま
あるくとのまへでう
のひあくいぶ
かりゆもせよあく
ふんのいあをて
ろるいあるぶう
それでいてこの
のそこのををう
「すくらくぶ」あ

こう　あや　ふく　あぐそ　ネう
こう　ぶ　せろふ　イヤ
のこ口
ひ人ふ
あうひ
ろるべ
えれいハ
ろるんよ
ろもんふる

柳亭種彦作
歌川國貞画

栄久堂梓行新舊稗史目録

増補忠臣藏　全六冊　晋米齋玉粒編　一陽齋前豊國画

繪本千年山　全拾冊　北尾重政画

繪本武者鑑　全四冊　十返舍一九作　香蝶樓國貞画

花軍春錦繪　前篇六冊　後篇四冊　十返舍一九作　香蝶樓國貞画

昔舊在多土佐　全四冊　宝田千町選　歌川國芳画

江戸ト一町親仁橋角
山本平吉販

[illegible]